

2019 年度第 2 回

vol.254 物学研究会レポート

## 日本人の匠精神

エバレット・ケネディ・ブラウン 氏

湿板光画家、日本文化研究家、東京大学先端科学技術研究センター外部研究員

2019 年 5 月 15 日

物学研究会  
BUTSUGAKU Research Institute

## 第2回 物学研究会レポート

2019年5月15日

5月の物学研究会は、アメリカ人湿板光画家のエバレット・ケネディ・ブラウンさんにご登壇いただきます。幕末に来航した黒船専属カメラマンを先祖にもつエバレットさんは1988年、日本に移住しEPA通信社の日本支局長として活躍。取材や撮影で日本各地を訪問し、そこで出会った人々を通じて、日本人が気づかない日本を発見してきました。

現在は、湿板光画家として活躍する傍ら、経済産業省クール・ジャパン官民有識者会議委員、日本文化フォーラム幹事なども務めています。今回は、近著『失われゆく日本』をベースに、日本に対する発見や想いを語っていただきます。

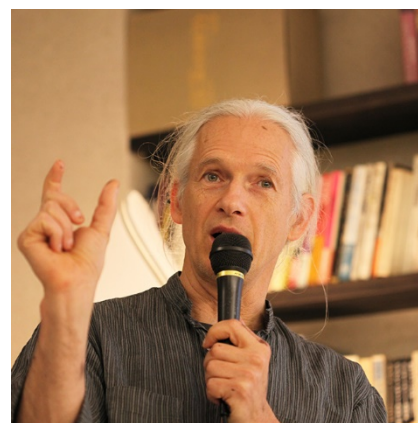
以下、サマリーです。

### 日本人の匠精神

講師

エバレット・ケネディ・ブラウン 氏

湿板光画家、日本文化研究家、  
東京大学先端科学技術研究センター外部研究員



エバレット・ケネディ・ブラウン 氏

#### 第二の脳を失った日本人

ブラウン：僕が、今の日本を見て感じるの「下地」が欠けているということです。下地には二つあって、一つは、自分が何者でどこから来たのかという文化的な背景、もう一つは、体の中に存在するものだと考えています。ひと昔前までの日本人は、二つの脳をもっていました。一つは、頭の中にある脳、もう一つは腸のあたりにある「丹田（たんでん）」です。そして、頭の脳で計算して、第二の脳「丹田」で決断していました。残念ながら、今の教育は第一の脳に向けたものばかりで、丹田の教育が

できていない。だから今の日本は弱くなっているのだと思います。

#### 空気感を表現する湿板光画

ここからは、僕が撮った写真を見ながらお話ししましょう。僕は、写真家として「日本の面影」をテーマに活動しています。これらは、5年ほど前に竹中工務店の仕事で日本の匠の世界を撮影したときの作品です。この仕事のおかげで、匠の美意識と建築に関心をもつようになりました。

これらの写真は「湿板光画」という技法で撮影しています。湿板とは、感光性のある鋳物でつくった薬剤を塗って撮影し、ガラスのネガをつくるという幕末時代の技法です。陶芸のようにうわ薬を使っていろいろな模様をつくる世界に近いので、写真を遙かに超えた表現ができます。「光画」とは、明治時代の学者たちが Photograph に当てはめる日本語として提案した言葉の一つです。「写真」よりもこの言葉のほうが、僕が目指している世界に合うので、「湿板光画」という呼び方をしています。

僕が湿板光画を始めた一つのきっかけは、どうすれば日本の面影、その場の空気感を写真に収めることができるだろうか、と考えたことです。そして、古典的な技法を調べていくうちに、湿板の技法が日本の湿った空気を表現するのに一番いい方法だと思いました。

もう一つのきっかけは、僕が明治時代の写真が大嫌いだったからです。遠い親戚が黒船の専属のカメラマンだったのですが、僕は彼が撮った写真も大嫌い。なぜかというと、日本人はどういうものかという図鑑に載せるために撮っているような写真で、本当の日本の姿を伝えられていないからです。だから明治時代に戻ってちゃんと撮り直したいと思いました。

こうしたことがきっかけで、10数年前から湿板光画という技法で撮り始めました。一時期は、国会図書館でコピーした明治時代の地図を見ながら、明治時代の服装で日本中を歩き回って、明治時代にタイムスリップできる場所を探しては撮影する、という狂気の時代を過ごしたこともありました。

## カメラマンの存在を消す

僕が普通の写真家と違うのは、「カメラマンがいない写真」を目指しているということです。湿板光画は露光の時間が非常に長いんですね。そのぶん、普通の写真よりもその場の気配、面影を感じ取れると思っています。たとえば、この右側の写真（佐川美術館 樂吉左衛門館の「盤陀庵」）の場合、露光時間は18分もあるので、その間、僕は別の場所に行ってしまうんです。とても繊細なことですが、物理

的に考えると、そこで呼吸をすれば自分の吐く息がその場に影響を与えるでしょう。僕がいなくなれば人の気配がなくなり、その場の気配だけを写すことができると思うのです。

また、湿板光画は感度が正確ではないので、露光の時間は肉眼でその場の光を確かめて、勘と経験で決めなければなりません。幸い、撮影の現場では、携帯暗室として使うテントを建てて、その中でネガを現像するので、もし失敗したとしても、すぐに撮り直すことができます。

## 空間から生まれる新たな空間

かつての日本人は、暮らしも、住まい方も、自然と調和していました。そのための重要な空間の一つが「縁側」です。僕は、日本の縁側の文化が大好きです。日本の感性は縁側で生まれたと言っても過言ではないと思っています。島根県にはとてもいい縁側の文化があって、お客さんや友だちが来ると、縁側で気楽に抹茶を立てて提供していました。残念ながら、最近は昔のような縁側がなくなり、こうした文化もほぼなくなってしまいました。

ですから、みなさんには素敵な縁側をつくることを提案したいと思います。なぜかという、今は100歳まで生きる時代ですし、超高齢化社会なので、縁側で読書したり、友だちと一服したり、自然の変化をゆっくり感じる場所が必要だからです。これからの日本は、縁側の時代だと思います。

もう一つ重要な空間は「床の間」です。縁側は内側と外側をつなぐ空間ですが、床の間は人間と神、自分と先祖、この世とあの世の空間をつなぐ場所でした。ところが、今の家には縁側もないし、床の間もありません。

床の間がなくなると、「しつらえの文化」も減ってしまいます。床の間は、実際にある場所のことですが、その場をしつらえることで、そこにもうひとつの空間が生まれ出されます。つまり、目に見える空間と、目に見えない空間という二つの空間が生まれるのです。

僕が日本に初めて来たときに感動したのは、こうした日本人の「空気づくり」でした。空気感といえ

ば、やはり茶室です。この写真は、千利休がつくったと言われる妙喜庵の茶室「待庵」と、楽吉左衛門の「盤陀庵」ですが、どちらも空気感が見事です。これらは、計算でつくれるものではなく、おそらく「第二の脳」の仕事なのだと思います。こうした空気を、どのようにつくるのかというのが匠の仕事であり、これからの日本の大きな課題だと思います。

## 日本の基礎文化の面影

次は、16年前に「日本の基礎文化」というテーマで撮った作品を紹介します。僕が初めて日本に来たとき、映像民俗学者の姫田忠義さんが撮った1950年代～70年代の記録映画の英訳の仕事をしていました。そのため、その映像が僕にとっての日本の原風景になっていたんです。それで、その原風景が残っている場所を、姫田さんの指示に従って全国を探し回って撮影しました。

ほかにもタイムスリップの仕方を教えてくれる先生が何人もいます。その一人が花人の川瀬敏郎さんで、彼は室町時代や平安時代の空気があふれるしつらえができる花の達人です。僕の師匠の松岡正剛さんもタイムスリップの先生の一人です。もう一人は、松岡さんの友人の高橋秀元さんで、彼には万葉集に潜んでいる空気感がタイムスリップの入口だということを教えてもらいました。

これは、千葉県の大原はだか祭りの情景です。ここに写っているのは、普段は塾に行ったりゲームをしたりしている今どきの子どもたちなのですが、そうは見えませんよね。こういう本物の祭りが残っているところは、その祭りが行われている最中は、現在、過去、未来が同時に進行しているので、昔ながらの芯の太い子どものように見えるのです。

## 国際都市だった奈良

奈良時代には、中国や韓国など東アジアだけでなく、ペルシャやインドなど、いろいろな国の優れた技術をもつ人たちが来て、日本の基礎文化となる奈良の文化をつくりました。おそらく、そのまま奈良

に住み着いて子孫を残した人もいたでしょう。そう考えると、奈良、平城京は非常に国際的な場所だったのです。

この指輪は『失われゆく日本』にも書きましたが、世界遺産になった沖ノ島で見つかった国宝です。じつはこの文様は、僕の友人が20年前にギリシアの博物館で開催されていたケルト文化の展示で見た、黄金の指輪の文様とそっくりだったんです。ということは、もしかしたら日本から西アジアまで運んだ指輪かもしれないし、西アジアのケルト人がつくった指輪が4～5世紀ごろ日本に入ってきたのかもしれない。そう考えると、ひょっとしたら指輪だけでなく、ケルト人が日本に入って来たのかもしれない。真面目な話ではありませんが、いろいろな想像がふくらみます。

## 日本の匠文化の原点

最近、もっと以前の日本にタイムスリップしようとしていて、日本に最初に来た人間は、どういう人たちで、どうやって入って来たのか、ということを考えています。じつは10万年前の日本には、ホモ・サピエンスとは違う人類に近い人がいたという話があるんです。10万年前といえばちょうどホモ・サピエンスがアフリカから出て、長い東への旅にでかけた頃です。そして5万年ぐらい前にヒマラヤの北や南を通して4万年前にやっと日本列島にたどり着いたのでしょう。

これは、そんなことを考えながら日本の神話にある天孫降臨をイメージして撮影した作品です。この光が降りて来るような感じは、薬品を調整してつくりました。

古代の海洋民族はシャーマンのような人たちで、寝ているときは自分の魂が行先を探しに行っていたといいますし、昼間でも星が見えたそうです。中南米の西海岸からも縄文式土器が発掘されていますから、どういうふうに来てきたかはわかりませんが、僕たちを超えた能力で昔の人は日本に入ってきたのでしょう。つまり、数万年前から日本に入ってきている人たちは、能力、体力、運があって、長い旅のなかで生き残った人たちだったのだと思いま

す。そして日本にたどり着くと、そこには海の恵がたくさんあり、深い森があり、安全な水が豊富にあった。しかも温泉も出る。それで旅を終えて定着しようと思ったのかもしれませんが。

そして、日本の森に暮らしながらあちこち探検しました。伊豆諸島の神津島で取れる黒曜石が、約3万年前から日本中に広がっていたことがわかっていますから、おそらくその頃から海上貿易が行われていたのでしょうね。僕はこの時期から、匠の文化が生まれたのだと思っています。なぜかという、この石器の写真を見てください。このようなきれいな削り方をしたものは、世界中のどこの国でも、だいたい1万年ぐらい前に登場したのですが、日本には3万年前からあったんです。ひょっとしたら、これが日本の匠文化の原点ではないでしょうか。

## 縄文文化の面影

僕は、縄文文化以前から縄は使われていたのではないかと直感的に思っています。そして、日本の暮らしの中に存在する縄文時代の面影は、1970年代まで続きました。それは、みんなで火を囲む「囲炉裏の文化」です。日本の山村に行くと、だいたい1960～70年代までは囲炉裏が残っていました。また、縄や竹を使って魚を日干しする習慣も、千葉県の房総半島に少し残っています。これも縄文文化の面影ではないでしょうか。おもしろいことに、田舎暮らしに憧れる若い人たちが、こういう文化を見てカッコイイと思っているんです。

そして、70年代に廃れてしまった縄文文化が、また復活しています。右側は縄文土器の写真ですが、6千年前の土器にこれほど繊細な装飾があった例は世界のどこにもありません。しかもこの土器は、非常に薄くて、実用的ではないんです。非常に効率が悪くてGood Designではないのですが、でもこれが日本の強みである「匠」なんです。僕は、Good Designはあまりにも単純すぎて、かえって日本を駄目にはしていると思っています。

一方、左側の写真は、10年ほど前の女子高生の携帯電話（デコレーション携帯）です。このまった

く実用的でないこのデコレーションは、縄文土器に通じるのを感じます。つまり、単にモノをつくるのではなく、彼女は携帯電話をデコレーションによってモノに命を吹き込み、自分の世界観を表現しているのです。命を吹き込むことは計算ではできませんから、これも第二の脳から来ているのではないかと思うのです。

## 第二の脳を育んだ「手の文化」

日本には、箸、折り紙、そろばんなど「手の文化」がたくさんあります。手を使うと第一の脳と第二の脳がつながるんです。そして、ひと昔前までは、ほとんどの日本人は手の仕事をしていました。

これら大工道具の写真ですが、こういう人が見えないところにも、自分の思いを表現しているところが匠なんですね。人から見えないところでも気になる。みなさん、たぶんそういう経験があると思いますが、この感覚が大事なのです。

この方は、第一の脳と第二の脳を教えてくれた、宮大工の第一人者の小川三夫さん。見事な第二の脳を持っていて、数百年前の職人の思いを感じ取るタイムスリップの旅ができる人です。こちらは有名な瓦職人の山田脩二さんです。

今の若い男性にあまり元気な人がいないのは、素敵なお父さん、素敵なおじいさんがいないからだと僕は思っています。ですから、こういう第二の脳を使っている人たちに会うことが、自分の力を出すきっかけになるはずですよ。

この写真は、ある家の門に埋めた巨大な天然の石です。埋めてしまえばほんのわずかな上の部分しか見えないのに、どうしてそこまでこだわるのかと棟梁に質問すると、「見えなくても感じるんです」という答えが返って来ました。おそらく、お腹で感じるのだと思います。

こちらの写真は、左側が左官の久住章さん。こういう文化が一番弱っていた数十年前に、彼は大胆なすばらしい仕事をして、左官の文化を元気にした人で、右側は彼の孫弟子です。こういう棟梁と弟子、

日本の父と若者との関係が非常に重要だと僕は思います。

## 若者の先祖返り現象

日本酒の麴や種の世界では、品種改良して何世代も使い続けた後で、突然原種に戻ることがあります。これを「先祖返り現象」と言うのですが、今の日本の職人の世界でも、この現象が起きています。

日本人はある意味で、明治時代や戦後に品種改良されてきましたが、今の若い人を見ると、日本の伝統文化、基礎文化というものを、古いものではなく新鮮で気持ちがいいものだと感じている人が増えているのです。

この写真は30代の庭師ですが、彼は昭和時代に廃れてしまった水琴窟の文化を今一生懸命広めています。こちらは、茅葺きの職人。茅葺き文化は、ほぼ廃れてしまっているのですが、彼はこれを復活させてカッコいいものをつくっています。ほかに、漆職人を目指している女の子や、廃れてしまった染め物の技法を復活させているデザイナーと染物家、古い文化の残る島根に移住して昔の暮らしをしている若者もいます。

## 現代に残るサムライ文化

こういう古い文化が残っている地域は、まだたくさんあります。たとえば、福島県の相馬地方では、800年続く侍文化を大事にされていて、毎年夏に開催される「相馬野馬追」という行事のためだけに、400軒以上の家が馬を飼っているんです。

この写真は、34代目の旧相馬中村藩の当主、相馬行胤（みちたね）さんです。湿板光画は、普通の写真に比べて、何十倍、何百倍も時間がかかるので、その人の内面的な様子が重なって来ます。相馬さんは、800年の地元の歴史だけでなく、これからの800年を真剣に考えている人で、その内面が出ています。

この小学生の女の子は、撮影する前に見たときは気が弱そうな感じだったので、露光にかかる10秒間、じっとしているのは無理だろうと思ったのです

が、内面的な強さが出たのでしょうか。見事にじっと座っていて、いい表情を撮ることができました。

## 下地をもつことの大切さ

家系を1000年以上も遡れる相馬さんは、自分の下地をしっかりとっています。そこで、同じような人たちのシリーズを撮りたいと思いました。

これは、松平郷松平家の25代目の当主で『失われゆく日本』の表紙になった写真です。こちらは、近衛家の近衛忠大さん。クリエイティブディレクターやデザインの仕事をしているので、もしかしたら一緒に仕事をしたことのある方がいるかもしれません。

こちらの女性は、非常に厳しい家に生まれ育って、それが嫌で大学を卒業するとパリに行ってしまったという人ですが、おばあさんが亡くなって、遺品の着物をたくさんもらったことをきっかけに家のことを調べると、先祖は清和天皇とつながっていることがわかったのだそうです。

もう時間なので最初の話に戻りますが、今とても重要なのは日本の下地、自分の下地を取り戻すこと。これによって自分の能力をもっと発揮できるようになるということです。ほとんどの人が三世代前の家系しかわからないと思いますが、自分のおじいさんがどこの生まれなのかを調べて、その地域に行って自分の足で歩くと、何かを感じることもできるかもしれません。

もう一つの重要な下地が、丹田にある第二の脳です。それを整えることで、今まで以上の力が発揮できると思います。長い1時間半の旅でしたが、ここからは、みなさんからの質問に答えたいと思います。

## Q&A

**Q1:** どのようにして、どうして、こういう世界に関心を持ち、こういう世界に深くはまっていかれたのでしょうか。

**エバレット:** どうして日本かという、これはやはり「縁」としか言いようがありません。子どもの頃、終戦直後に日本にいた父親の写真日記に、瀬戸内海の写真がたくさんあったのですが、そこには見たことのないボートや船がたくさん写っていて、なかでも巖島の海に浮かんでいる鳥居の写真に興味をもちました。この巨大なものはなんだろうと。考えてみると、それが生まれて初めての謎だったんですよ。

僕のおじいちゃんも大正、昭和の時代に、よく日本に来ました。そういう家だったので、日本がとても身近でした。中学生の頃は、日本からの留学生と仲良くなりましたし、高校時代の写真の先生は、毎年夏に日本に来て座禅をしていたので、日本の話をいっぱい聞かせてもらいました。このように、いろんなことの積み重ねがあったからです。

**Q2:** 写真を撮るのに時間がかかるというお話がありました。撮影の前準備や被写体とのコミュニケーションに時間をかけないと、あのような表情は出てこないのではないかと思います。どんなことを意識しているのですか。

**エバレット:** まず薬品の温度管理なども含めて、とても集中力がいらいます。ネガをつくること自体は簡単なのですが、ものすごく奥が深いので、何か余計なことを考えているとうまくいかないんです。携帯暗室テントの中は、一つの茶室のような空間で、その中で行う準備の作法というものを自分でつくって、手と目と心を統一しています。言い方を変える

と、潜在意識がはたらくようにする。もう少し深く言うと、潜在意識と自然界との不思議な関係性、思いがけない偶然性が、集中力によって生まれるようにしているんです。

ネガを撮影するまでは、こうして自力で最善を尽くすのですが、撮影するときは他力に任せます。たとえば人を撮るときは、被写体を見ません。被写体を見ると、その人との関係性が生じるので、なるべく自分を消すようにするんです。そして自然に任せる。すると、撮影するときに急に強い風が吹いたり、逆に急に静かになって鳥のさえずりが聞こえたりするんですよ。その空間から、うまくいくかどうかを感じ取るのです。

**Q3:** このような世界で活躍されているエバレットさんにとって、今の日本のデザインは、どのように映っていますか。

**エバレット:** いろんな病気にかかっているように思います。特にコンプライアンスの問題が日本の企業を駄目になっている。一番の問題は、第一の脳を使いすぎていること。つまり、計算しすぎていることです。第一の脳が自力で、第二の脳が他力とも言えるので、頭で下準備して、丹田で決める、という感覚が必要なのではないかと思います。

**黒川:** 今の時代は、多くの人たちが物事の深いところに思いを馳せる時間を失っていて、表面だけの新鮮さに流されてしまうという状況があるのではないかと思います。僕自身も、新しいものはすぐ古いものになるけれど、深いものは何千年経っても感動できるはずだと自分に言い聞かせています。今日は、エバレットさんに深い部分を見せていただいたので、たくさんのが学べたと思います。本当にありがとうございました。

以上。

2019 年度 第 2 回物学研究会レポート

## エバレット・ケネディ・ブラウン 氏

湿板光画家、日本文化研究家、東京大学先端科学技術研究センター外部研究員

---

写真・図版提供

物学研究会

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2019 BUTSUGAKU Research Institute.